

フィリピン戦線の苦しみ

茨城県 小菅 正次郎

十七日 宇品港上陸

十一月二十六日 水戸工兵隊帰還

水戸陸軍病院入院(胃の吐血による)

十二月 水戸陸軍病院退院召集解除

昭和十九年五月八日 宇都宮輜重連隊に召集、

第一〇三師団輜重大隊高塩中隊横田小隊配属

三十日 門司港出帆、済州島、

支那大陸沿岸、台湾を経てマニラ港上陸ルソン島

北部配備、カガヤン川東岸で山岳地帯に入り敵上

陸に備えて陣地構築

昭和二十年十一月二十日 マニラ港出帆

二十五日 浦賀港上陸復員

私は大正七(一九一八)年二月二十二日、茨城県筑波郡谷和原村で生まれ、昭和十三(一九三八)年度第一乙種合格でした。

私の入隊は現役入隊ではなく、教育召集の補充兵入隊でした。次に私の軍歴の概要を述べます。

昭和十三年十二月一日 宇都宮輜重連隊へ教育召集

三十一日 教育修了除隊

昭和十四年六月五日 水戸工兵連隊へ召集

十八日 神戸港出帆

七月一日 中支漢口上陸

中支派遣第十一軍第三通信隊野戦電信第三十九中

隊配属(岡村部隊尾崎隊盛部隊塩原中隊林小隊)

鄂城県付近の警備

昭和十五年九月三日 復員のため漢口出発

昭和十三年十二月一日、私が教育召集を受けた頃のわが家の家族構成は、父母、二人の兄、私、弟の一家六人でした。

私は東京に離れて暮らしていたので、召集になっても家庭に大した影響はなかったと思います。

私の従軍生活は三回の召集で、内地、中支、比島と

三個所に分かれましたが、よく考えると比島が最も苦しく特に食べ物が欠乏したので、今こうして生きているのが不思議なくらいに思えます。敵しく苦しく「生きている幽霊」と戦友間で呼び合っていたことを覚えていきます。

ルソン島の北部の山中で陣地構築という名目で、道路造りをしました。敵飛行機の空襲は多く、木の茂みの中へ隠れました。部隊の人員は百人を超しましたが、工事用の機材もなく、ただ十字鍬、円匙しかないので能率は上がりませんでした。最も困ったのは塩がないことで、他に代替の食料がありません。塩がないと体がもたないのですが、原住民に「山の中に塩水の出る井戸」を教えられて助かりました。主食はタロ芋、水牛の薫製、野生のザクロの実、猿の食う木の実なら人間にもよからうと猿の真似をしました。その他蛇、かたつむり、沢ガニ等々いろいろと食べました。

山中を歩き、峠で下の谷を覗くと谷底に友軍の自動車落ち込んでいます。リンガエン湾に敵上陸との知らせにより南下を始め移動しました。日中は森林の窪

地で休み夜間行動をします。そのうち斬り込み隊を編成して、対戦車地雷を抱いて敵戦車に体当たりをするという任務を受けた戦友が出発するのを、何回か見送りました。

敵と遭遇。その時私は班長と共に小高い丘の木陰で見張りをしていました。敵の自動車隊が来るので、班長は窪地の本隊へ報告するため降りて行ったのですが帰らず、しかも、敵は私の目前三〇〇メートルほどのところで砲や銃を無差別に撃ってきます。私も友軍の本隊も逃げました。それからはもう逃げるのが精いっぱい、食料もなく、マラリア、栄養失調、負傷で戦友はどんどん減ってゆき、最後は四分の一ほどになりました。

原始的生活のいろいろなことを身につけました。第一に火をおこすこと、食を長持ちさせること、米を炊くこと、物の大切さを忘れてはならんとつくづく思いました。

私は足を負傷して本隊から残置され三人でグループとなり、本隊よりずっと後方を移動しました。私は足

の負傷、マラリアの重症者、腹部負傷で蛆虫がわいている者と三人です。私は歩くうちに化膿止めの薬を拾い、それを利用して足の傷は次第に良くなりました。この三人で本隊と別行動で傷病兵のみの移動の期間は、食べ物無く、最も困りました。猿の真似はこの時のこと。三人で銃を各人一丁ずつ持ち三方を警戒して進みました。

衣服は破れて腐り半裸です。顔色もよくない。お互いに相手を見て「生きている幽霊が歩いている」と笑いかいました。終わりには鉄カブトも重いので捨てました。銃と弾丸と手榴弾のみ。敗戦を知ってから、小銃の小さい部品を一つずつ捨て、武装解除の時、銃が使用不能の状態にしておくという発想です。話によると大隊長はこの逃走中に原住民に捕らえられ殺されたとのこと。

印象に残る悲惨なことを一つ。

雨季で雨がよく降ります。川は増水して流れが強くなり、丸木橋があるが、一人が渡れないので、胸までつかって渡河しました。川の中流で水勢に負けて流さ

れながら私の方を見えています。丸木橋を渡った二人も「生きている幽霊」だから救助する体力がありません。ただもう黙って見殺しにするばかり。これくらい辛いことはなく、後々まで夢に出てきました。

戦友が死んでも埋めてやれません。岩と石の地盤では出来ないで、木の葉をかけて被います。食い残した食料はもらいました。小指を切って焼いて袋へ入れて持っています。米軍の捕虜になり乗船する所で荷物検査、身体検査でお骨はすべて残して帰還しました。ああ、敗戦の身の辛さ悲しさよ！

戦友の骨は故郷へ帰れません。私の部隊は工兵隊付の輜重隊。胸間の記章はキ。まるき部隊と称しました。

戦争が終わり、九月十日頃軍曹以下三人が軍使となり白旗を持って米軍の方へ行きました。帰って来ての話によると「おいしい、うまい物をタラフク食べさせてくれた」との由。協議の末「どうせ殺されるのなら、このまま食わずに死ぬより、米軍の方でうまい物を腹いっぱい食べて死にたい」と意見一致。全員米軍

に投降した次第です。

とにかく比島へ渡った時一三〇人いましたが、内地へ帰還したのは十三人とちょうど一割の数です。身体の不自由に負けて、自決した者も多かったです。

昭和二十年十一月二十五日、浦賀上陸復員。考えても考えても、あれだけ苦しみ食料にも不自由し、負傷して、傷病者三人残置され、思く考えると、まるで自決を図れと言わんばかり、戦友三人「生きている幽霊」と笑い合う敗残兵の姿。濁流に流されて行く友を見殺しにしか出来なかった悲哀。

今この平成の時代に八十歳を超えて生きているのがおかしいくらいである。夢ではないのだろうか？

昭和二十三年結婚し、妻は現在も健在。子供六人（男四人、女二人）、孫十人。現在自治会長、三十六社の神社の総代長。

平和で豊かな平成の日本に安住してふと苦しかった戦時の労苦を思い浮かべ、不幸にも散華していった数多くの戦友のあの顔、あの姿、あの出来事等を思い出

しては、遙かに御冥福を祈り、御遺族の御多幸と御健勝を切に祈念するばかりです。

合掌